ピアノ初心者の心を開くポリフォニー曲の価値
── 入門教則本研究 ──

砂田眞理子

要旨

バイエルピアノ教則本は日本では長らく初心者の導入書として用いられている。教員採用試験曲や保育士養成校におけるテキストとしても多く使われており，そこを目指す学生はぜひ勉強しておくべきである。バイエルにおける作曲の特徴は，単旋律に伴奏を付けたホモフォニー音楽が多いことである。同じ教則本でもシュンゲラーピアノ教本は早い時期からポリフォニー音楽を扱っている。実際の弾き歌い原曲では，右手がメロディのものもあれば左手がメロディのものもあり，左手が弾けないために苦戦する学生が多く見られる。また，そこではピアノを弾きながら歌うと言う行為を同時進行する必要がある。ポリフォニーは，複数の声部が同時に独立して進むので，指，目，耳の能力を最大限に働かせる特徴がある。一見複雑で難しく感ずるポリフォニーが，実は弾き歌いに効果的なのである。従って，シュンゲラー教則本を使うとバイエルに不足するポリフォニーを補い左右の手の独立，読譜力，表現力を高めることが出来る。本論はポリフォニー曲を初期の段階で学生に導入する価値を論じるものである。

キーワード：ポリフォニー・左手の独立・反進行

はじめに

保育者養成校で求められるピアノ演奏力は，子供の歌の弾き歌いが出来るレベルが望ましいと考える。現在，筆者が指導しているＡ校･Ｂ校ではピアノ実技科目が１年半から２年間で必修である。半期ごとに試験に合格し，バイエル→ブルグミュラー→ソナチネへと進むように目標が設定されている。２校の入学時に於けるピアノ未経験者の数は年によりバラつきはあるが，近年，増加傾向にある。未経験者の読譜力は高校で音楽を選択していないなど，学校教育レベルである。初心者にとって両手を同時に動かすこと，２段の大楽譜を読むことは根気と時間を必要とする。忙しい学生にとって困難にぶつかると，練習不足から苦手意識を持ってしまう。その結果，ピアノ技術が身に付かず，弾き歌いは保育実習までに間に合わないこととなる。この実状を改善するためには，導入期の教材選択が重要となる。現在，導入期の教材として多くはバイエルが中心として選択され，シュンゲラーはあまり選択されていない傾向があるが，導入教材としてポリフォニーが重要であると考える。その理由は下記の２点である。

1. 音楽の構成が見通せる。
2. 左手が独立して動かせる。

以上の２点の要素を持った教則本が効率良くピアノ力の向上に関わると考える。

初心者にとって弾き歌いが不安なのは左手が弾きにくい，独立して動かせない事である。学生の苦手意識は，これまでバイエルで左手が右手の付随的な役割として導入されて来た事に問題があると考える。それは「右手が旋律として左手が伴奏としての役割」となり両手の動きを固定することとなるので，左手は右手の付随としての役割となり独立性が低下することとなる。ところで，古典的な音楽の童謡では低音がメロディになっているものもあり，ポリフォニーではメロディがあちこちに登場する。これを弾き分ける訓練をすると右手・左手のどこにメロディが現れても，それを自由に歌わせて弾ける様になり，左右の手が均等に動かせる。つまりポリフォニーの構造が左手の独立を可能にする。また１の要素に繋がることだが，初歩の学生がポリフォニーを弾くことは，音楽の構造を知り，演奏の方向を示す羅針盤を得るようなもので心強い。さてバイエルはドイツのプロテスタントの正道を行く単旋律に伴奏を付けた音楽であるが，使い方次第で右手と左手の役割が固定するなどの欠点を持ちやすい。この様な現状を打破するには，導入期をポリフォニーで開始すると初歩の学生にとってハードルが高いと感じる両手の独立と読譜力に効果があると考える。そこで，ポリフォニー教材を多く扱っているシュンゲラー教本をバイエル教則本の前半に入れ替えて使うことでバイエル中心の教材に新たな試みを実践したいと考えた。

1-1 使用教材バイエル教則本の長所・短所

筆者が指導しているA，B校共にテキストは標準バイエルピアノ教則本を使用している。日本の保育者養成校，小学校教員養成校ではおよそ7割がバイエルを何らかの形で取り入れている[1]。バイエルは保育者に限らず日本におけるピアノ教育の礎として150年もの長期に渡って使用されて来た歴史と不動の地位を持っている。

1　柏瀬愛子・牛田幸子「ピアノ教本バイエルについて分析とその活用」P 2

安田は「バイエルと言う言葉は，ピアノや音楽の意味を超えて，初級，入門，基礎，効果が上がる，といった言葉として日本の文化になった。」と述べている[2]。それほど音楽界，教育界を超えて浸透している。しかし，その賛否両論は何度も語られバッシングも起きた。本場ドイツでは誰も知らない誰も使わないと言う事が伝わるとバイエル離れが起きた。反面，基礎を作るには効率良く機能的であるという風潮があるとバイエル復活がみられたりする。現在も保育士，小学校教師の採用試験曲になっており，またバイエルの進度がピアノ演奏能力の目安として保育士や現場の教員に受け止められている。そこでバイエルの教材としての特徴を長所，短所に分類した。

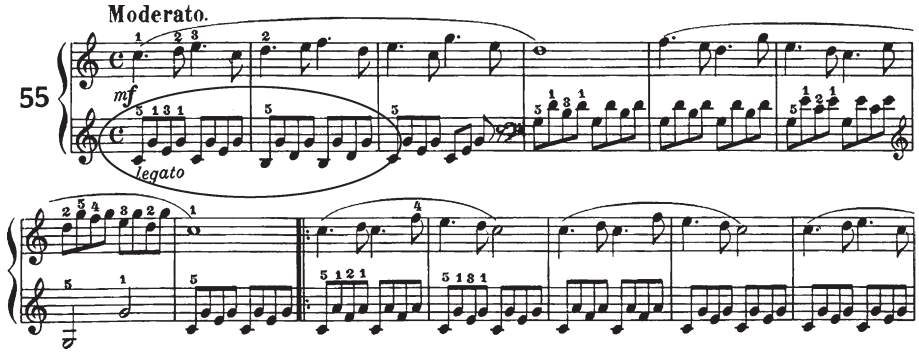
2　安田　寛「バイエルの謎」P 14

表1 バイエル教本

長　　所	短　　所
・メロディの美しさ ・シンプルで分かり易い。 ・ハ長調が多い。 ・臨時記号が少ない	・単純 ・機械的 ・繰り返しが多い ・リズムの変化に乏しい ・左手の訓練が少ない ・多声音楽が少ない ・80番から急に難しい ・右手旋律左手伴奏が多い

表1の様に2つの項目は長所・短所の両面を持っている。特に短所の項目で問題なのは左手の指の独立訓練と多声音樂が少ない(カノン3曲)ことと，右手の旋律，左手の伴奏スタイルの曲が多い(106曲中72曲)ことである。バイエルは，旋律を伴奏で支えるホモフォニックな曲が多い。

譜例1



譜例1バイエル55番に見られる左手の「ドソミソ」と言う伴奏形はアルベルティ・バスで出来ていることから，先が予測出来る弾き易さがある一方，機械的で単調な繰り返しの演奏を引き起こす可能性を持っている。左指の動きは右手に従属されるため左手の独立した旋律線は出ない。また，単調で同じような旋律の連続は初心者の音楽的興味を下げることに成りかねないと考える。

表2 アルベルティ・バスのメリット

1	単純　定型化　予測が効く　初心者に弾き易い
2	主旋律を歌わせやすい
3	分散和音の繰り返しにより，拍子感が明確になる。

アルベルティ・バスは，表2のような特徴があり18世紀中頃から急速に普及した当時の様式だったが内面的な

深みのある表現に不足し最近はあまり見られなくなった。この形態は，バイエルだけでなくクーラウやクレメンティのソナチネ等にみられるように，古典派の楽曲に多く使われている。しかしロマン派に入るブルグミュラーにはアルベルティ・バスは殆ど見当たらない。古典派のソナチネ・ソナタの特徴はホモフォニー奏法であり，その１つがアルベルティ・バスである。機械的な指運動の訓練にはなるが独立した指の練習には向かないと考える。

1-2 2声のポリフォニー教材を扱うシュンゲラー教本

入門時に必要な技術は，左右の手の独立であり，両手を平等に発達させるには２声の反進行の曲が相応しいと考える。アンリエット・ピュイグ＝ロジェは「小さくたって上手な手」のなかで「左右の手を同時に扱うこと左右を独立させることが，初期のピアノ学習の重要な目的である。また，反対の動作が左右同じ筋肉を同時に訓練する為に道理にかなった最適のもの」と述べている[3]。ルドルフ・ガンツは「子供にさえ，手の対称的な構造に気付かせること。基礎的技術は左右対称の反進行で訓練することが，最も有効である」と述べており[4]，対称的練習法の自然な動作が指の独立を効率良く音楽的にすることを強調している。これらの反進行の考えは，これまでユニゾンをオクターブで重ねることに限ってきた慣習を打ち破るものと考える。古屋は「左右同じ指を同時に動かす方が左右違う指を同時に動かすより易しい。これは左右異なった動きをするには，右脳から左脳により強い指令を送らなければ右脳は左脳に負けて同じ動きをしてしまうと言う脳の仕業によるものである。」と述べている[5]。

3　ピュイグ・ロジェ「小さくたって上手な手」P 8
4　山口雅敏「演奏技巧と脳機能を発達させる対照的練習法」P 10
5　古屋晋一「ピアニストの脳を科学する」P 29

図１　A　左右同じ指を動かす　　B　左右違う指を動かす

引用１古谷晋一(2012)「ピアニストの脳を科学する」春秋社

このように反進行は弾き易いが複雑で難しい印象も持っている。というのは左右の指は同じでも音が異なり，別の音を耳で聞き分ける行為が必要となる。従って２つの異なる旋律が独立しながらも調和しているポリフォニーは，音楽的興味を喚起し指に優しく基礎を取得するのに最適の教材と考える。

海外の様々な教則本が翻訳され手に入るようになった20年程前に各国の特徴的教育理念を現す教本が続々出版された。ドイツの教則本はバイエルを別にして豊富にあるが，日本で強固に定着している本は少ないと思われる。その中でシュンゲラーピアノ教本はピアノの弾き方を学びながら，音楽を総合的に習得していく入門書としての特色がある。ピアニスト・作曲家のハインツ・シュンゲラーが1935-48に完成させたピアノ教育体系で２巻の教則本と３巻の併用曲集から成る。狭義のソルフェージュの学習に意が払われ，また教師のための指導に関して提言が随所に盛り込められ，指導書としての役割を持つ規模の大きな教則本である。このシリーズを代表するシュンゲラー１には下記(表３)に示すように４つの領域を平行して学習するカリキュラムが組まれている。

表３　４つの学習領域

1	教材としての楽曲
2	技術の練習
3	リズムの訓練
4	楽典　　指導法

導入期から２声のポリフォニーで曲が開始するのが特徴である。シュンゲラーは表3-2，技術の練習の中で第一に指の独立を目標に上げ，その為に有効と思われる５本の指によるカノンと模倣の形態による２声の曲を多く提示している。

表4　作曲形態の比較

教則本	対位法的楽曲	和声的楽曲
シュンゲラー(213曲)	140曲(カノン，模倣)	8曲　連弾21曲，他45曲
バイエル　　(106曲)	10曲(カノン3曲)	73曲　連弾22曲

表4に見られるようにバイエルの対位法的楽曲は10曲と少なく，それに比べてシュンゲラーは140曲と約10倍多い曲目となっている。対位法的楽曲は先の2つの要素(①音楽の構成が見通せる②左手が独立して動かせる)を満たすもので，弾き歌いのピアノ技術を身に付けモチベーションを上げると考える。さらに教材は下記の表5に示す様にシュンゲラー自身による教育目的の強い作品と誰もが知っている民謡･童謡･大作曲家の名曲をイメージしやすいタイトルを付け，左手をポリフォニーに編曲して載せているので現代的な楽しさも味わう事の出来る配分となっている。

表5　3種類の楽曲教材

1　シュンゲラー自身のオリジナル作品	独奏曲(練習曲・タイトルの付いた曲)
2　良く知られたドイツの民謡 あまり，知られていない古い歌	霞か雲か　こぎつね　蝶々　カッコウ のんきな馬車　ガランが草　いばら姫
3　ドイツの大作曲家(ヘンデル　ウェーバー　シューマン)の小品	メヌエット　おやすみ坊や　メロディ 兵士の行進

これらのことから，ポリフォニックな作曲法で書かれたシュンゲラーピアノ教本は保育士を目指す学生に効率良くピアノ技術が習得出来ると考えレッスンに導入したい。シュンゲラーとバイエルは80年の時代差があり作曲法も異なるが，難易度の配列，流れ等共通点が挙げられる。そのためバイエルの代りにシュンゲラーを導入する場合の違和感は少いと思える。シュンゲラーは動物や自然に根ざしたタイトルが多く，学生もイメージや親しみが持ちやすくそのうえ指の独立訓練と複雑なリズムの練習と言うピアノ技術の現実的問題に対応出来る教本である。

次に2冊を比較するため，バイエルピアノ教則本とシュンゲラーピアノ教室1の全体内容を一覧表に示す。

2-1A バイエルとシュンゲラーの形態，内容，指導のポイント一覧表

表 6

	バイエルピアノ教則本						
	初　歩		中　級			上　級	
No.	①1-11	②12-43	③44-52	④53-64	⑤65-85	⑥86-99	⑦100-106
曲の形態　独奏　連弾	番外曲　右手　左手　両手，各 24 曲　連弾曲のみ 平行進行，順次進行 ・連弾曲　3 手(生徒右手 1 番 C，生徒左手 2 番 G)　4 手(生徒両手 3 番 -11 番ユニゾン C と G ポジション) 一部形式　小節数 8-32	両手，5 度音階練習 2 声の♩による旋律と伴奏形 連弾 4 手(32-34)G ただし生徒は C 4 手(41-43)Am 二部形式　三部形式 小節数 8-24	旋律とアルベルテイバス，分散和音 5 度音階練習 メロディに対旋律(51)4 手連弾(44)から ♪までの接続練習 二部形式 三部形式 小節数 10-38	旋律に伴奏(アルベルテイバス，分散和音) カノン(60) 4 手連弾(63，64G 調生徒は C 調) 三部形式 二部形式 小節数 8-32	模倣と反進行(65) 旋律に伴奏(分散和音，ワルツ型)旋律と伴奏(分散和音・ワルツ型) 旋律に対旋律(73) カノン(83) 1 部形式 2 部形式，3 部形式 小節数 8-24	旋律に伴奏(保持音付分散和音，ワルツ型，アルベルテイバス) 4 手連弾(86-87 の♫♫♫ユニゾン) 2 部形式 3 部形式 小節数 12-40	半音階(105)， 2 声のユニゾン(106)保持音付分散和音ワルツ型 アルベルテイバス 3 部形式 ソナタ形式 小節数 16-48
楽典　読譜	𝄴拍子𝄵𝄶𝄷𝄸音名 𝅝𝅗𝅥𝅗𝅥.𝅘𝅥 スラー，反復記号 拍子記号と変化記号𝄽𝄼𝄼 楽譜　音程　音符と休符 Moderato. Comodo. 𝄴𝄵 Allegretto. C(G)	mezzo staccato legato，タイ 低音部加線，拍子 ソ－レの G ポジション ラ－ミの Am ポジション C　G　Am	オクターブ記号 ♪の練習 𝄢 𝅘𝅥.♪ 𝄷 C ポジション 音域拡大上下 2 度 C	𝄢　大楽譜拍子，強弱 legato　dolce，𝄷 ＜ ＞ Am ポジション C ポジション G ポジション 𝆒 𝆓 𝆐 dim. cresc. decrese	♫♫♫ 3 連符 臨時記号(♯ ♭ ♮) 前打音　アウフタクト leggiero C　G　D　A　E　F staccato　staccatissimo	複前打音♫♫♫♫♫♫ ♪の流暢な動き 速度記号と強弱記号 保持音 F　♭B　C　Am	複付点音符 保持音，前打音 総まとめ 40 節の長い曲 3 オクターブの跳躍 C　F
奏法(学習内容)	C のポジション，G のポジション，拍子を数える 𝄼𝄼𝄽左手と右手の異なる指番号　左右同じ音 鍵盤と指の結び付き読譜の理解，連弾によりハーモニイの美しさ，音符休符の長さ，拍子がわかる。	旋律と伴奏 均一で明確な打鍵 同音は同じ強さで軽く ♩による 5 音の平行，反進行一定のテンポを保って弾く。	左手 C-F-G の和声進行 旋律音拡大 オクターブの跳躍 ♪の弾き方 一拍半と半拍のリズム付点 4 分音符の弾き方。	左手 C-G の和声進行 腕を動かすことによるポジション移動 ハ長調音階指使い ヘ音記号を学ぶ音域拡大 鍵盤との結び付き	音階の指使い 指の交差 1-3，1-4 の 指くぐりとかぶせ 拍子とテンポ，調号 長調短調音階の理解 運指，手首の移動	3 度の重音♫♫のユニゾン， 左手の保持音和音連打，無音指替え，メロデイと伴奏のバランス フレーズの始めとおさめ方	半音の指使いユニゾンの強い性格。♫♫♫♫によるアルベルテイバス　テンポアップで軽やかに弾く。
指導のポイント	連弾に於いて生徒は拍を数えながら先生の伴奏の様々なリズムパターンを聴く。先生と呼吸を合わせる。 2 音目を聴いてから指の重さを移動する。静かに手を上げる。	legato に弾く。次の音に響きが重なるくらい前の指を残す。 左手の 2-5 指を安定させる　なめらかに弾く。 左手のスラーの切れ目での響きの切り方を丁寧にする。	左手は静かに弾く。 左手の伴奏時親指の力のコントロールに注意 スラーは肘を上げず近くで弾く	フレーズの移動は最初の音を目で確認し，すばやく手を移動する。 一拍先を見て弾く。	強弱を付けて音の動きを立体的に表現する。手首を柔軟にして legato に弾く 音階の指交差は手の移動を素早く行うことで捻らず出来る。	3 部形式の作りを捉えてメリハリの有る表現をする。フレーズのまとまりを手首の動きと共に捉える。	左手♫♫♫♫は揃うように耳で聴く。テンポを一定に弾く。各フレーズや転調による場面転換は呼吸と手首の動きを合わせる。

バイエルピアノ教則本

- バイエルは 1 番-64 番が「基礎」を弾く上巻であり，65 番-106 番が「小品・お楽しみ曲」の下巻と言う 2 つに分かれる。
- 106 曲全て番号で表示される。番号の付かない番外曲がありそれが，突然入る。
- 6 回出てくる連弾は表①，②に集中しており残りは後半に前後に関連無く配置されている。
- バイエルによる解説が曲の所々に見落とす位に目立たなく記入されている。

2-1B

表7

	シュンゲラーピアノ教室1				
	初　歩		中　級		上　級
No.	①1-31	②33-61	③62-92	④93-121	⑤122-213
曲の形態 独奏 連弾	両手反進行　両手予備練習曲 2声のカノン タイトルのある小品3曲 一部，二部形式。ハ長調のみ。 小節数4-16 リズムの訓練第1課主題と変奏1，2	反進行の練習曲　2声のポリフォニー 2声のカノン(模倣　反行形 𝄼 𝄼 𝄽 開始曲) タイトルのある小品6曲。一部二部形式　両手共高音部記号。ハ長調のみ 小節数8-24　リズムの訓練第1課。 変奏3，4，5	大楽譜　音域拡大　2声のポリフォニー　演奏カノン　声部の入れ替え。 タイトルのある小品5曲 二部形式　臨時記号♯と♮の付いた曲　ハ長調 小節数4-16 リズムの訓練第1課。変奏6，7，8，9，10，11	ホモフォニック2曲。6度の和音楽曲。 タイトル付き小品6曲。左手の保持音曲。二声の模倣，声部の受け渡し，掛け合い。 ハ長調の曲とイ短調の曲　音階と終止形　臨時記号♭の付いた曲。 2部，3部形式，小節数4-33	カノン，コラール，行進曲，メヌエット子守唄，セレナード等タイトルの付いた小品　37曲　三声，四声の楽曲　3部，複合3部形式 手の交差　♯系全調を使った各調の曲。小節数4-40 リズムの訓練第2課主題と変奏　1　2　3　4　5　6　7　8
楽典 読譜 調性	𝅝 𝅗𝅥 𝅗𝅥. 𝅘𝅥 𝄞　タイ　スラー　legato フレーズ弧線　連弾のみ速度記号有り $\frac{4}{4}$ $\frac{2}{4}$ $\frac{3}{4}$ 拍子　拍を数える。	音名。♪，♪，音符と休符の暦時。 付点複付点音符 𝅗𝅥. ♪ ♫♫ ♬♬ 付点音符による色々なリズムの組み合わせ ♫♫♫ $\frac{6}{8}$ $\frac{3}{8}$ 拍子，スタッカート　オクターブ記号	𝄢 *f* *mf* *p* シンコペーション，staccato， 臨時記号　強弱記号 ♯ と ♮ 音域拡大　全てハ長調	ハ長調の主要三和音の基本形と転回形 ハ長調とイ短調　長音階と短音階その終止形　♭，重音 アルペジオ音域の拡大 ＜ ＞ *f* $\frac{3}{2}$拍子	♯系全調(C，G，D，A，E，B，♯F)とその平行調(Am，Em，Bm，♯Fm，♯Cm，♯Gm，♯Dm)の音階 三和音の転回形と終止形。3連符。 保持音と ♬，♪ 重嬰記号 拍子の種類とシンコペーション
奏法(学習内容)	体の自然で力みの無い状態の維持。 左右の手の独立　親指固定。 他の4本指の打鍵練習 (ド－ソ)の5音ポジション 両手反進行　左右別々の音左右同じ指	耳の訓練　2声の低音を聴き分ける。 上声を歌う下声を弾く。拍を数える。 拍の分割と延長。両手の新しい音符(シラファ)アウフタクト　休符から開始する。ズレるフレーズ弧線　左右別々のリズム	3度の重音　♩のスタッカート，保持音の練習 タイの付いた演奏曲　𝄼 𝄼 𝄽 𝄾 から始まる曲　左右の開始が異なる曲	主要三和音の基本系と転回系の指番号(2と3指の選択)広い音域をなめらかに弾くための指のくぐりと指の交差，親指の移動と支え。手の交差。手の収縮，拡大。強弱記号。	黒鍵の位置を覚える。各調に固有の指使い，共通の指使いを覚える。保持音を伴う外指の強化。三度の重音legato，三度の重音スタッカート，移調，3連符　様々なリズムの組み合わせがとれる。拍をまたぐスラー。
指導のポイント	左右対称の手の動きによりなめらかに弾く。スラーにより呼吸を感じる。 フレーズの終わり手を上げる。 指番号を意識する。 左右別々の音につられない。	片手はlegato，片手はスタッカートで弾く。耳で響きを聴き分ける。異なる要素を同時進行する ・慌てず落ち着いてゆっくり弾く。 加線上と加線間の新しい音を覚える。	手の移動により，運指が変わる。 親指，4　5指の置き方形に意識を向ける。 連弾於いて付点と3連符2つのリズムを区別する。 つられないで独立して弾く。	タイトルからイメージできるふさわしい弾き方を表現する。強弱をつけて表現する。指の交差。音階と分散和音を弾く滑らかに弾くため手首，肘に不要な力みが入らないように充分注意する。常に響きを聴く。	なめらか，流暢に弾く指先はキーに付けてから弾く。ゆっくり，片手を練習する付点のリズムで，次に弾く指の用意をする。常に拍を感じ一定の速さで弾く。

シュンゲラーピアノ教室1

- 横軸に213全曲の配置を番号順に難易度を初級・中級・上級の3つに分けさらに5つに細分化し分類した縦軸には対位法的作曲形態と独奏・連弾の配分，楽典，奏法(学習内容技術)，特徴的指導上の項目を取った。縦軸と横軸から段階的レベルに於ける学習内容がわかる。(♯系全調使用により⑤の上級のほうが曲数が多い)
- シュンゲラーの特徴としてカノン，2声のポリフォニー，左手の独立，楽典，連弾，練習曲(指の独立用反進行の予備練習4小節)が5段階全てに入っている。
- 指の交差と外指の運指法を採り入れた小品は，初心者にとって弾きにくい指の技術を独習出来るように，配慮している教材である。
- 読譜と指番号の決定と言う1つの壁を乗り越える力が付くように総合的分野からソルフェージュを教育目的にピアノ教本を作成している。
- 曲は番号とタイトルの両方で示される。番号だけでタイトルの無い曲もある。進度だけを上達の目安にせず題名からイメージする音楽の多用な姿を体験することで興味を高める効果がある。
- バイエルより一曲の長さが短く細々としている。短いため記憶の定着が良く基礎を集中して学ぶ様に組み立てられている。楽典は調性と音価，音名，音部記号を詳しく解説し分かり易い，演奏に役立つ。

2-2 バイエルとシュンゲラーの一覧表の意図

2冊の教則本の中身を知り特色をつかむために，曲の形態，学習内容，楽典，奏法の4項目を一覧表に載せた(表6・7)。一覧表を作成することにより，初級・中級・上級と上って行く中で学習内容の難易度の変化も容易に見て取れることになると考えた。

1. バイエルの構成

表8　バイエル構成 ── 4つの分類

1	番号の付いた独奏曲	12番-106番(2の連弾は除く)
2	番号の付いた連弾曲	1-11，32-34・44・63-64・86-87
3	番外曲12曲	練習動機と各調音階と半音階
4	付録	右手，左手，両手，各々24の練習曲動機

バイエルは表8に示す様に4つに分類出来る。106曲の他に番号の付かない番外曲がある。番号の順をこなしていく事に専念していると番外曲を飛ばす可能性があるが，基礎を定着するのには大事な部分である。配列は2の連弾で始まりその後11番から1の独奏が中心となる。2は始めと前半に多く後半は少ない3は練習用動機で曲中に混在している。4は2頁に亘り始まりの楽典の次にまとめて入っている。3と4について配置は前後の曲と無関係になっている。3と4の扱い方はバイエルの下巻を弾きこなす鍵と言える要素が入っている。しかし，4つの構成はバラつきがあり計画性が認められない。「元々別の本を併せたのではないか」と言う説まである。バイエルはレベル的に上巻と下巻の2つに分ける事が出来る。赤バイエル・黄色バイエル，として販売もされている。グレードが上巻と下巻で大きく異なる。(上巻は64番まで，下巻は65番から)その理由は上巻が「静かにした手」[6]と言われ「ポジション移動・指の交差の無い運指」で弾ける。「静かにした手」をマスター出来ることが，初心者にとって1つの壁になる。5本の指を5個の鍵盤に定着させ，置いた手のポジションを動かさずに63曲が弾ける。ここがバイエルの初心者に対する「静かにした手」の効果である。この原理を知っていれば独学でも弾けると言えるのである。実際のピアノレッスンでは，1番から60番までを自己練習に任せ，省略する先生もいる。しかしバイエルで基礎を身に付けるには，64番までが基礎を学ぶソルフェージュとして重要な部分である。それに比べ後半は纏まった独奏曲が多く，基礎を修了した後のお楽しみ曲ともいえる。上巻は調号の無いハ長調とイ短調だけで下巻に♯系全調の4シャープまで一気に提示され，その後に♭系2まで出てくる。各調の音階練習後曲が出てくる。調と音階は読譜力の基礎であり音楽の理解に重要である。音階の奏法にはポジション移動が必要で指の交差，親指の潜りと返しなどにより上巻とは格段にグレードが高くなる。ヘ長調が終わりに急に集中して6曲出てくる。それはバイエルの中の名曲で，存在感があるものが多い。ヘ長調は童謡の弾き歌いに一番多く使われている調であり歌い易く保育の現場で実用の頻度が高い調である。ヘ長調音階の運指は♯系4つの調と異なり「1-4，1-3」でポジション移動する。さらに「1-4」の4番目の指は♭シの黒鍵を弾くので注意が要る。しかし4本の指を弾いてから移動するので「1-3，1-4」でポジション移動する調より心理的に楽かも知れない。初心者には80番前後よりヘ長調が多い90番後半から100番前後の方が弾き易く，指の運動力と音楽性を習得することが出来る。

下巻では，旋律とアルベルティ・バスの伴奏形による練習曲と言うより小品になっている。上巻で基礎を学んだ後のお楽しみ曲としてバイエルの名曲もある。しかし初心者には調号の多さによる黒鍵の使用により70番後半から急に難しくなる。これ等のことから上巻とは別の意図で作られた別冊を組み合わせたと思われる程難易度の配列は不規則である。

6　安田　寛「バイエルの謎」P 126

2. シュンゲラーの構成

213曲はちょうどバイエルの2倍の量であるが短い曲(16小節が最多)が多いので半分にするとバイエルと同量と見なせる。これは短い曲を数多く弾かせる教育的意図と見る。新しい課題を4小節-16小節までの短い曲の中で完成度を高める事に役立つ。バイエルではA-B-Aの3部形式で，シュンゲラーより再現部のAが多く1曲の長さは8小節位長い。さて全体は5つに分けられる。120番までを4つにわけ122番以降を終わりまで1つにし

た。90 曲を一括りにするのは，♯系全調(長調とその平行調)が出てくることによる。調号が増えると読譜の複雑さが初心者に懸念されるが楽典のルールが音楽的思考を助けると言うシュンゲラーのポリシーに基付くもので全て弾く必要は無いと考える。しかし初歩から全調の調号に眼を慣らしておく事はその後の読譜に有益である。また連弾は各章毎 7 回出てくる。リズムの訓練として 30 種類の異なるリズムが体験できる。213 曲は以下の 5 つの楽曲形態に分けられる。

表 9　シュンゲラー構成 ── 5 つの分類

1	導入　始めから両手で弾く，反進行による左右の手の独立
2	カノン(模倣)を中心した 2 声の曲
3	メロディに異なる対旋律を付けた曲(臨時記号♯)
4	主要三和音とその転回形による小品(臨時記号♭　ハ長調)
5	♯系全長調とその平行調を使ったポリフォニックな楽曲

シュンゲラーのカリキュラムは徹底的に計画され緻密な構成で作られている。バイエルのように 2 巻に分かれることはなく一貫した流れがある。また番号を追う事が上達の目安に陥らないように，番号を曲の右上に小さく示しタイトルを付け曲の表現に役立つ配慮が感じられる。

シュンゲラーではポジション移動は少ない。ハ長調の「ド-ソ」までの 5 音を中心に上下に音を 1 音ずつ拡大することで指の独立訓練をする。1 オクターブの音階を弾く前に 5 音内で親指のくぐり，2，3，4 親指の交差，4，5 の独立練習が行われる。バイエルとの違いは限られた音の中で指の独立が習得出来るように技術面での支援が手厚く丁寧である。また，指導書として教育者を目指す者にとって学習内容の解説が教師と生徒の対話形式で出来ているのは分かり易くレッスンに実用的である。なお，上級に入った 122 番以降でも曲の中で 1 オクターブの音階が出て来ることはない。但し，シュンゲラーでも全ての調を紹介する時には両手による音階練習を反進行形で提示している。バイエルと違うのは音階練習と同時に主要三和音の基本形と転回形を弾くように作られている点である。和音の基本形と転回形に於ける指番号の違いは，初歩の学生にとって大事な技術である。転回形の指番号を身に付けると，左手の動きが苦手だった学生にも和音掴みが楽にできる強い見方になった。シュンゲラーでは三和音の転回形を 3 つの音を和音の形にしたものとアルペジオの形にしたものの 2 つを提示し，音程に相応しい指の幅を考えて運指の決定をすると言う基本を大切に扱っている。

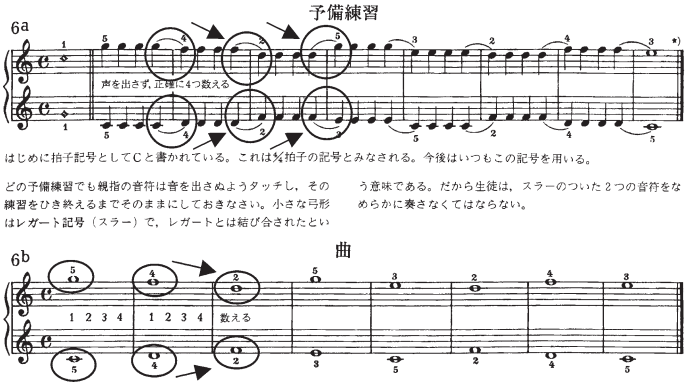
次に実際にシュンゲラーの各曲のなかで対位法的作曲法を強く示している曲を譜例で取り上げ，その構成を分析する。特に音の動きの方向と指使いについて詳しく比較するためにバイエルを数曲取り入れた。モチーフのポリフォニックな線の動きと運指について印を付け解説した。曲は初級，中級，上級の 3 つのグレードに分け紹介していく(譜例 2-6)。

3. シュンゲラーの譜例分析による対立法的２声曲の紹介

ポリフォニックな曲をバイエルの譜面と比較し作曲法の違いから起きる学習内容の違いを提示する。

譜例２(1-2)　　初級レベル

譜例 2-1-a　(導入)比較１(反進行と平行進行)シュンゲラー６番とバイエル３・７



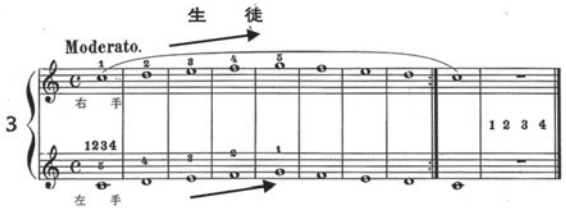
・反進行による２音のスラーとレガート奏法，両手同じ指，「5-4-2」は手の内転により指の動きが楽である。

・上記の♩メロディを𝅝で表示すると 6a の♩４つの響きが聞こえてくる。

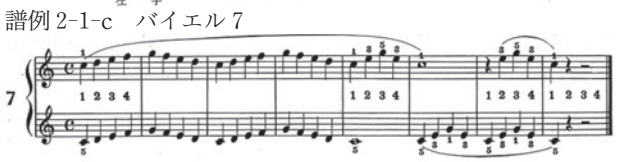
・バイエル３番では𝅝で音階練習をした後７番で♩の打鍵練習をする順番はシュンゲラーと逆である。初心者には♩で開始する方が拍の意識を持ち易い。

・バイエルは両手ユニゾン平行進行による５音音階を弾く。左右音は同じ指は異なる。左右の手の独立は出来ない。

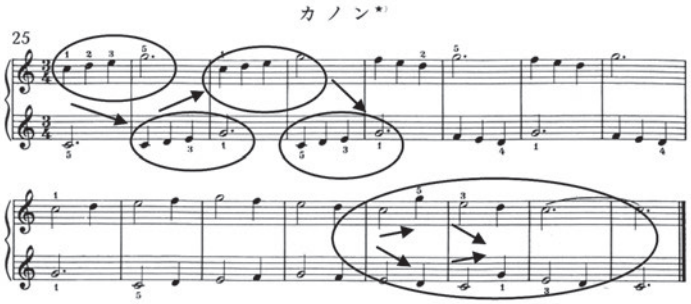
譜例 2-1-b　バイエル３



譜例 2-1-c　バイエル７



譜面 2-2-a　比較２(カノンとアルベルティ・バス)　シュンゲラー25 番とバイエル 31 番



・２小節のフレーズ１小節遅れのカノン　入るタイミング→切るタイミングがフレーズを作る

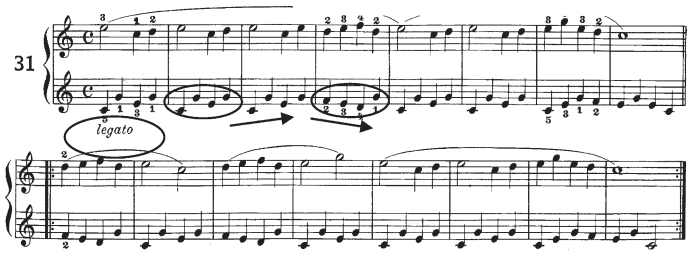
・２段目は５音階(順次進行)の平行進行　右手の先行するモティーフを聞きながら左手が模倣する。
左手「5-4-3」指の動き

・右手の旋律に左手のアルベルティバス(ドソミソ)伴奏が付いた曲。

・左手に「ド・ミ・ファミレソ」と言う旋律ラインが見つけられる。

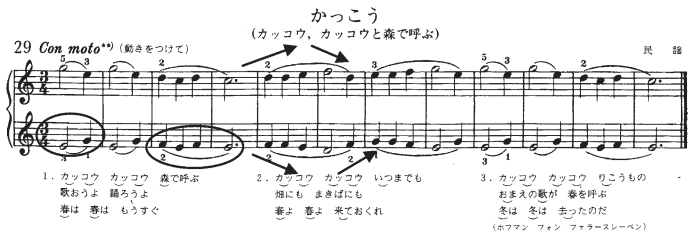
・上記のシュンゲラー25 番と雰囲気が異なる。

譜例 2-2-b



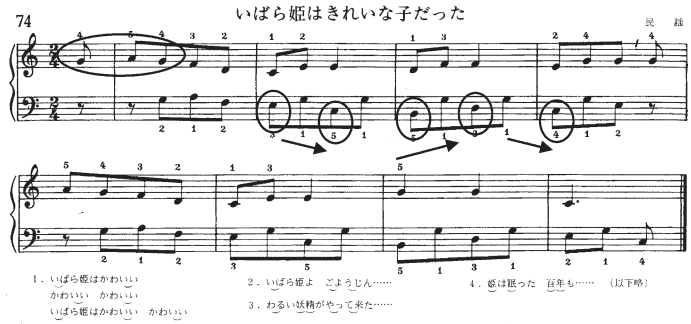
譜例 2（3-5）

譜例 2-3



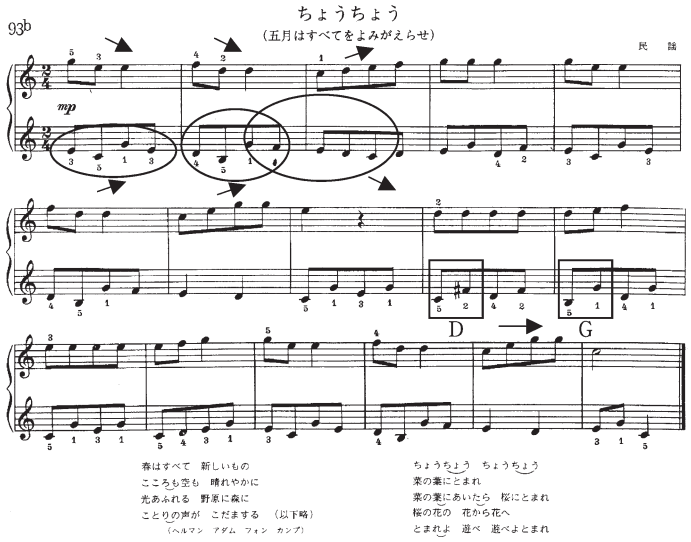
- カッコウのメロディに３度下で反進行の対旋律を付けた２声旋律
- 指は同じで音は違う。「2-2-3-4-2」スラーの掛け方は両手一緒

譜面 2-4



- アウフタクト開始による右手先発の旋律
- １拍遅れの模倣と反進行の動きをする対旋律
- 右手の入りの息遣いを感じて左手が弾く。
- 右指「4-5-4」

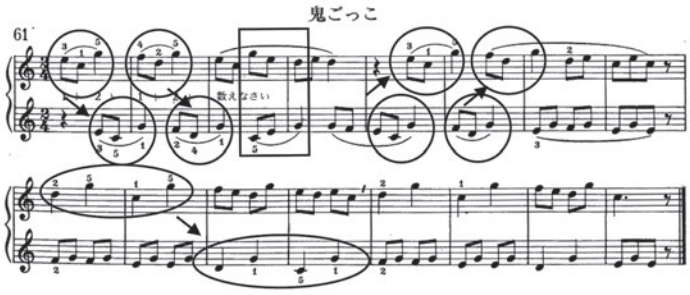
譜面 2-5



- 童謡「ちょうちょ」のメロディに反進行の分散和音による対旋律を付けた。
- ２段目に借用 D-G がある。左に独立したメロディラインがある。
- 左手の ♩♩♩♩ のリズムにメロディラインがある独立した２声曲と見る。
- 左手の「４－５」指の拡張，「3-4-5-4-3」，隣接音，「4-5-1-2」指の独立練習

譜例 3（1-2）　　中級レベル

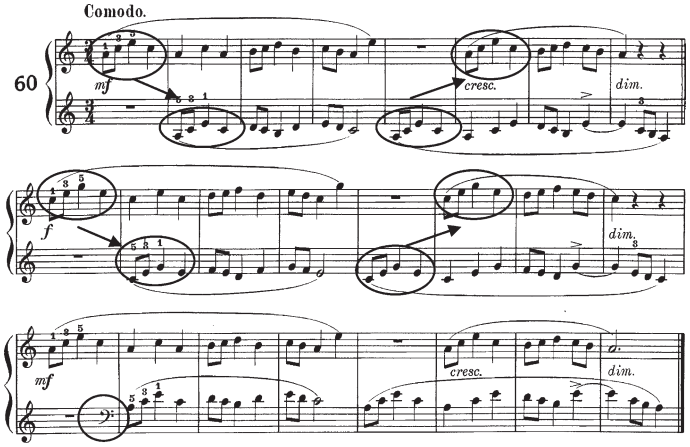
譜例 3-1-a　比較 3　シュンゲラー61 番とバイエル 60 番（カノン曲）



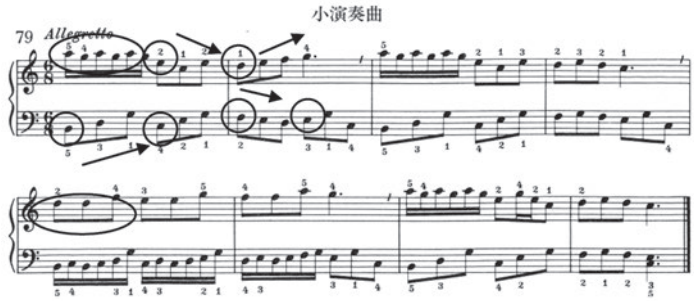
シュンゲラー61 番 「鬼ごっこ」
ハ長調 2/4 拍子
右手先行
・2 拍子 1 拍遅れのカノン
　5 小節目入れ替え。
　左手先行「3-5」の動き。
・3 小節目の 2 拍目左入りの指同じ反進行による。
・バイエル 60 番とよく似たカノンで 61 番に出てくる。
・シュンゲラーの方が後半なめらかな動きの新しいモチーフをカノンにしている。

バイエル 「60 番」Am
イ短調カノン $\frac{3}{4}$ 拍子
・バイエルの中で数少ないポリフォニックな曲の 1 つ。1 つのモチーフが同じように繰り返される。
・右手先行 5 小節目左先行，中間部は平行調 C で転調し同様に反復する。再現 A は左手がヘ音記号で書かれる。
・左手が 𝄢 で書かれる。
・厳格なカノンではない。

譜例 3-1-b　バイエル 60 番



譜例 3-2

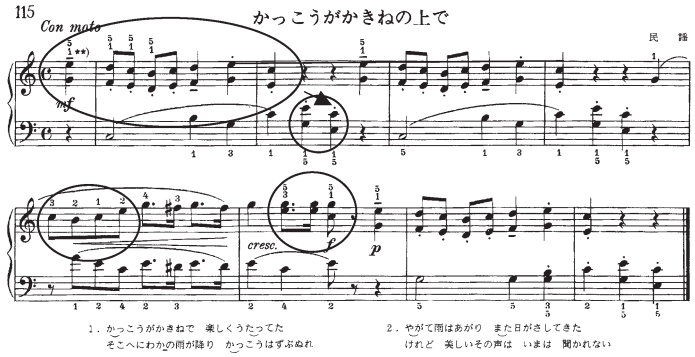


・$\frac{6}{8}$ 拍子　外指「5-4」トリルの練習 ♫♫♫ 連譜を弾く。
・5 音に倚音ラを加えた音型の対旋律
・V－I の開始
・倚音　左と右反進行

譜例 4（1-3）

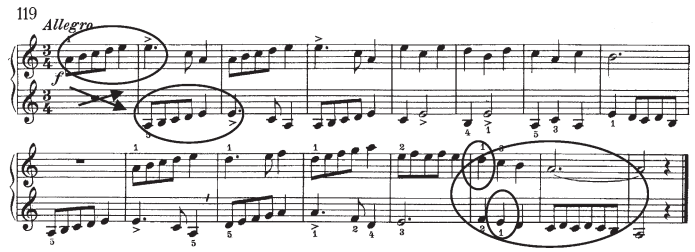
中級レベル

譜例 4-1



- 右手アウフタクト 6 度の和音」によるメロディを，左手対位旋律が支える。
- 中間部 2 声の旋律右手「3-2-1-2」指くぐりと重音♪等

譜例 4-2-a　比較 4（カノンと保持音を伴ったアルベルティバス）　シュンゲラー119 番とバイエル 91 番の比較



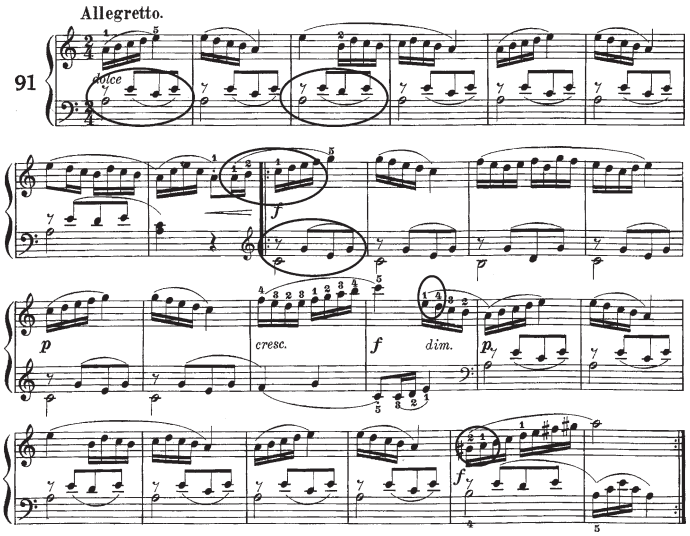
シュンゲラー119 番　Am

- イ短調 5 音音階によるメロディ左手 1 小節遅れのカノン
- 2 段目は左右入れ替え。終わりから 3 小節目指交差有り。右「1-3」指かぶせ。左「2-1」指潜り。

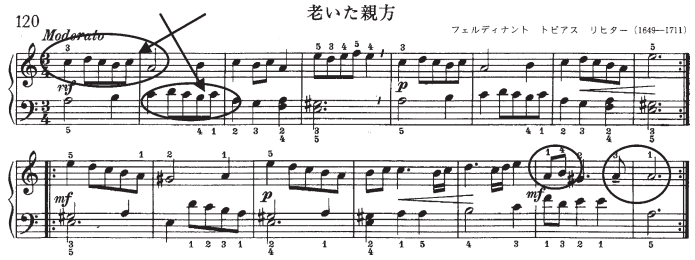
バイエル 91 番　Am

- 保持音を持つ左手アルベルティバス　ラミドミ，右手の音階練習合わせ，右手指の交差と手の移動　シュンゲラー119 番とほぼ同じモチーフ伴奏形のアルベルテイバスはシュンゲラー110 番と比べ前進性が強くなる

譜例 4-2-b



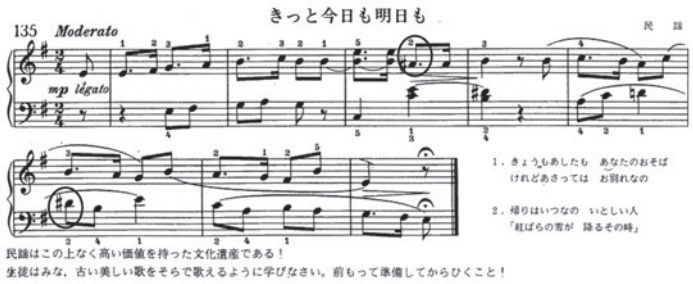
譜例 4-3



- 右手と左手が入れ替えの模倣，するしり取りタイプ。
- 掛け合いになる。
- 右手「1-4」指の縮小，終わり 2 音ラ-ラ「3-1」の指くぐり

譜例 5（1-5）　　中級レベル

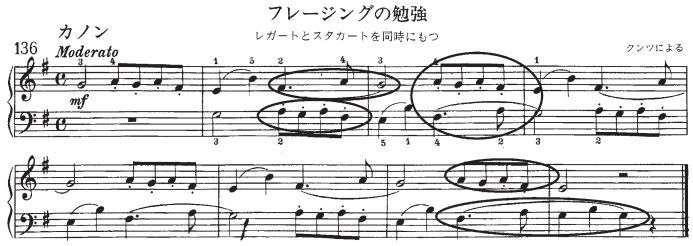
譜例 5-1



ホ短調

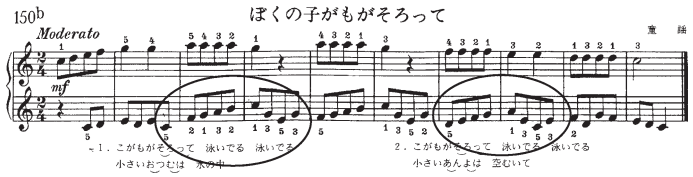
- アウフタクト１拍遅れの模倣的対旋律。
- 右手は ♩.♪ と ♪♪ のリズムの違い。導音♯レの位置♯ラによる借用臨時記号の理解。

譜例 5-2



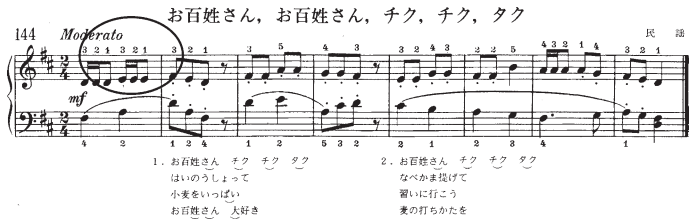
- １小節遅れの「厳格カノン」
- １小節内で「スラーとスタッカート」と言う「正反対のタッチ」を両手別々に同時に行う。
- 指先の独立に有効

譜例 5-3



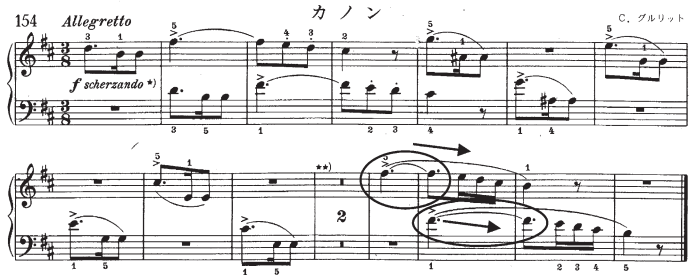
- 童謡　子ぎつねのメロディに１拍遅れで対旋律を付けた音階を含むモチーフ。
- 左指「１・２・１・３・２」，指の「5-2-5」の移動

譜例 5-4



- D 調右手同音反復「3-2-1」指変える。
- 反進行による対旋律のリズム。左は安定した 𝅗𝅥𝅗𝅥 で支える。

譜例 5-5

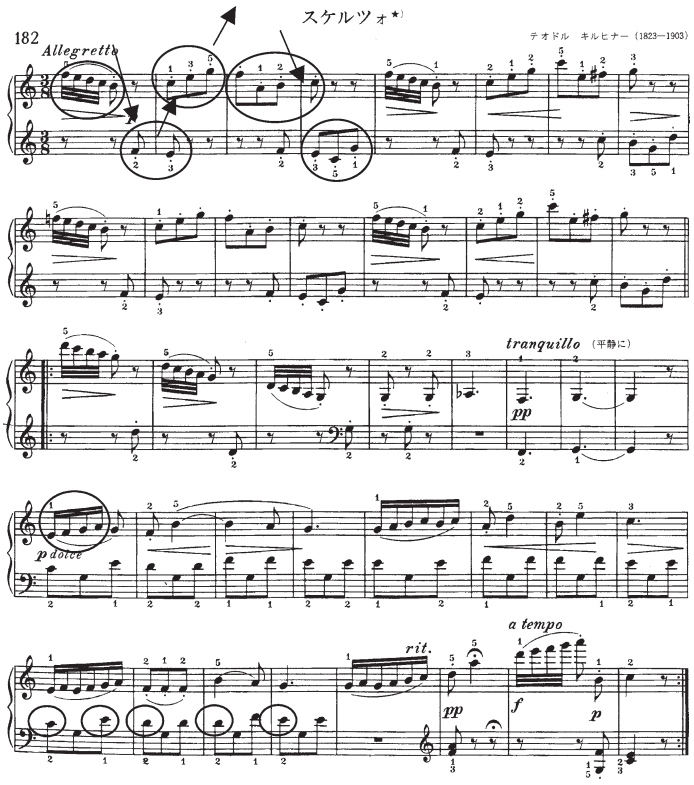


- $\frac{3}{8}$ 拍子ロ短調１小節遅れのカノン
- ♩.♪♪ の一貫したリズムモティーフと♯ファのタイが特徴。
- ２小節の休みの後，主題のモティーフがリズム変奏される。

譜例 6（1-2）

上級レベル

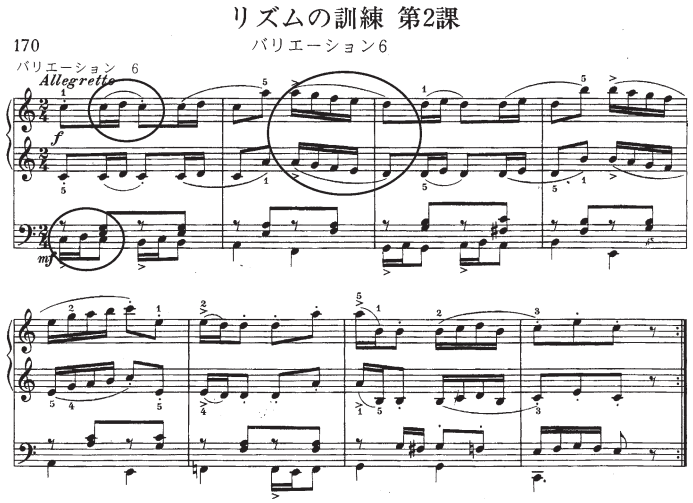
譜例 6-1



$\frac{3}{8}$ 拍子

- 「♪♬♬」の下降するリズムと「♪♫」の上行するリズムのコントラスト。
- 両手の掛け合いによるメロディ。
- 4，5段目は2声による曲想が変わる落ち着いたメロディになる。
- オスティナートによる左手伴奏は「1・2」指がメロディラインを作る。

譜例 6-2



連弾曲

- ♫♪ と ♪♫ による反対のリズムとを同時に組み合わせる練習。
- 先生の ♬ を聞いて生徒が，まねする形をとっている。
- ♩♪♩♪ の裏打ちのリズムが全曲を支配する。
- ♪♬♬ の両手ユニゾンの動きが安定した流れで弾ける。

3-2 シュンゲラー譜例分析から出された学習内容

シュンゲラーピアノ教室１ ── 213 曲より特に対位法的な手法の強い作品 17 曲と比較のためバイエル 4 曲の譜例を取り上げ初級・中級・上級の 3 グレードに分け作曲技法と学習内容（ピアノ奏法と指使い）について分析した。その結果シュンゲラーの作曲法の特徴として次の 3 点が得られた。

表 10 シュンゲラーの作曲上の特徴

1	カノンの多用
2	反進行の動き
3	模倣形　多用なリズム

1. カノンの多用

カノンはシュンゲラーでは一番の特徴であり全体を通して頻繁に出て来るが，比較 2-2a「25 番」に見られるように最も易しいスタイルは，初心者の興味を惹きつけ導入に相応しい。始めのモチィーフを後から追いかける形の奏法は，分かり易く楽しい。カノンは「真似る」と言う生来持った能力を使うので，誰にでもすぐ理解出来弾きたくなるモチベーションの高い形態である。またあちこちに現れるモチィーフを弾きわける指と，聞き分ける耳が訓練され曲の造りを見通す力が付く教育価値の多い優れた教材と言える。また比較 3-1a 中級レベルであるが，シュンゲラー「61 番鬼ごっこ」，バイエル「60 番」の 2 曲のカノンは共に曲集を代表する名曲の 1 つであり「真似る」要素が強い作品で初見でもすぐ弾けると言う誘惑に駆られる。実際Ｂ校では 1 年目レスッン前のピアノ発表曲として弾く曲の 5 割以上がバイエル「60 番」である。（過去 10 年間）それは上記の理由から選択していると思われる。しかしシュンゲラー「鬼ごっこ」では，バイエルのように簡単にはいかない。多くの初心者がモチィーフの変わり目である 3 小節の 2 拍目，左手裏拍で，モチィーフの方向が逆に変わるため躓き，流れに乗れない。これは新しく変化した音形を意識せず耳コピーで「真似した」ことによる。このようにシュンゲラーでは応用力が付くよう親切な教育的配慮がしてある。

2. 反進行の動き

反進行の旋律は比較１－初級レベルでは譜例 2-1a，6a ⟶ の付いたラインに見られる様に指の独立を身に付けるのに効果がある。シュンゲラーでは導入の最初から両手の反進行の形態を学習する。反進行では左右の指は同じで弾き易いが音は違う。一方譜例 2-1b バイエルでは 3 番に見られるようにシュンゲラーとは違い逆の両手のユニゾン平行進行で開始する。平行進行では音は同じで指の動きは左右異なる左手は右手に釣られて動く可能性がある。初心者は左手に苦手意識を持っている。左手をスラスラ弾けることはピアノ演奏を容易にし，伴奏に余裕を持たせる。左右同じ指を使う反進行のメリットについては１－２入門期におけるポリフォニー楽曲の所で述べて来た。シュンゲラーは左手の指の独立を教育理念に掲げていて反進行の動きはその為に有効奏法である。初級・中級・上級全ての譜例に見られ，この教則本の特徴でありポリフォニースタイルの独立した複数の声部を構成する要素である。左右別々の音を弾く為に耳で聞き分ける必要があるが譜例 2-5「29 かっこう」，譜例 2-7「93 b 蝶々」，譜例 5-3「150 こぎつね」，に見られるように良く知られたドイツの民謡を使い音楽的に分かり易い曲を使い反進行の対線律で弾けることは，初心者にとってどこかで聞いたことのある知ってるメロディーを楽しみながら余裕をもって左指の独立が取得出来る仕組みになっている。

3. 模倣形・多用なリズム

カノン以外の対位法的形態として定旋律に全く別の対旋律を付けた曲がある。中級レベルに多く出てくる譜例 4-1「115 番　かっこうが，かきねの上で」，1 小節目右手 6 度の和音連打メロディを 2 分音符と 4 分音符による 7 度音程の対旋律で支える。また 5 小節目の付点 8 分音符と 16 分音符によるリズムによる旋律の変化に対し反進行の同じリズムを使って支える。定旋律に反対の性格を持つ要素を入れて変化を付けるように作られている。それでいて主旋律に調和する響きや模倣を使う。独立しながらも調和している関係になっている他にも譜例 5-1「135 きっと今日も明日も」，譜例 5-3「150 ぼくの子がもがそろって」，譜例 5-4「144 オ百姓さんチクタク」にも同様に見られる。また模倣形に譜例 4-2「119 番」に見られる受け渡し，譜例 4-3「120 老いた親方」に見られる左右の入れ

替えがある。これ等は左右の手を独立させ腕の動きを滑らかに使う奏法で弾く面白さと楽しみが生まれる。上級レベルの譜例 6-1「182 番スケルツォ」に見られる 32 分音符による 4 小節に渡る左右受け渡しがある。初級段階で 32 分音符の 4 連符は難しく感ずるが順次進行の下行音形であり思ったより楽である。纏めとしての長い曲で後半は右手に現れる落ち着いたメロディを左手がオスティナートの伴奏を付ける。1 曲の中で静と動を合わせ持つ表現の楽しみがある。連弾は曲集全体に亘ってリズムの訓練として各章の節目に出てくる。シュンゲラーは連弾を初心者の教材としてとりわけ重要に扱っている。連弾曲は全てオリジナル作品で 30 種類の異なるリズムを体験出来ることが特徴である。又童謡によく出てくる，効果的で面白いリズム ――・付点・3 連符・タイ・シンコペーション・休符を伴うウラ打ちリズム等 ―― は初心者には難しいものである。一人でリズムを取るのは不安に感ずるが，連弾により先生の弾くのを「まねる」形で体験出来，耳で自然に覚えられることが心強い。シュンゲラーの連弾シリーズを使うと上記に示した童謡のリズムを全てカバー出来るので弾き歌いにきわめて有効性が高い教材である。譜例 6-2「170 番」では先生と生徒が掛け合いで互い違いのリズムを打つことで 16 分音符 4 連を吊られないように均等に流れを持って弾ける様配慮がされている。

以上のことから次の結果が得られた。線的に考える対位法的見方は，音楽を構造面から理解することでありそれは表現に於ける基礎と言える。音による思考は耳よりもさらに眼が必要である。そして，楽譜を読む楽しみは学習者の音の世界を広げる。また，ピアノで歌うと言う事は線を発見することであり旋律が音楽の特徴や印象を表現する要素である。このことから，初心者にとって必要なピアノ力は 1,音楽構造の理解，2,旋律を見つける読譜力，この 2 点に集約できると言える。ポリフォニーにはこの 2 点が自然としかも効果的に習得出来る造りであると言う結論である。

4. まとめ，2 冊を編集する ―― バイエルとシュンゲラーの合本 ――

これまでにポリフォニー教材を多く扱うシュンゲラーを使うと，複数のことを同時進行すると言うピアノ特有の奏法が，効率良く音楽的に身に付くと言う事を，バイエルと比較し述べてきた。

その結果，実践として 2 冊の教本が 2-1A，B，2-2 に見られるように作曲形態は異なるが配列等共通点が多くあり，入れ替えて使うと効率の良い理想的なテキストになると言う考えがある。

つまりシュンゲラー「1 番-92 番」迄をバイエル「1 番-64」番迄と全曲入れ替えることで，バイエルの基礎編である前半をポリフォニー教材で学習し，指の交差を必要とするお楽しみ曲の後半をホモフォニー教材で学習するのである。入れ替えの場所は，バイエルの下巻に入るところで，ヘ音記号が出てくる大楽譜の部分である。バイエルの下巻は基礎を終えたお楽しみ曲で小品となっており，日本人の耳に馴染んだ名曲もあり，それらはある種の演奏の楽しさを与えてくれるもので，試験曲にもなっていて残して弾く価値があると考える。

そこで，学生のモチベーションをあげるために，シュンゲラーとバイエルの特徴を生かした合本を作成したいと考えた。

下記に示すように，ここに形態，内容，比較一覧表の形態と樂典迄を 2 段まで切り取り比較に入れる。眼で分かるように→と枠付けをする。そして上バイエル，下シュンゲラーの配置にして，シュンゲラーの①-③(1-92)迄をバイエルの①-④(1-64)迄と入れ替える事を図示する。

バイエルとシュンゲラーの合体

表

	バイエルピアノ教則本				
	初　歩		中　級		
No.	①1－11	②12－43	③44－52	④53－64	⑤65－85
曲の形態	番外曲、右手、左手、両手、連弾曲のみ各２４曲。 平行進行、順次進行。 ・連弾曲のみ。 ３手（生徒右手１番Ｃ、生徒左手２番Ｇ）。 ４手（生徒両手３番－１１番ユニゾンＣとＧポジション）。 一部形式　小節数８－３２。	両手、５度音階練習。 ２声の四分音符による旋律と伴奏形　連弾。 ４手（３２－３４）Ｇ。 ただし生徒は℃。 ４手（４１－４３）Ａｍ。 二部形式。 三部形式。 小節数８－２４。	旋律とアルベルテイバス、分散和音。 ５度音階練習。 メロディに対旋律（５１）４手連弾（４４）全音符から８分音符までの接続練習。 二部形式。 三部形式。 小節数１０－３８。	旋律に伴奏（アルベルテイバス、分散和音）。 カノン（６０）。 模倣と反進行（６５）。 ４手連弾（６３，６４Ｇ調生徒はＣ調）。 三部形式。 二部形式。 小節数８－３２。	旋律に伴奏（分散和音、ワルツ型）旋律と伴奏（分散和音・ワルツ型）。 旋律に対旋律（７３）。 カノン（８３）。 １部形式。 ２部形式、３部形式。 小節数８－２４。
楽典	拍子　ト音記号、　音名。 スラー、反復記号。 拍子記号と変化記号。 楽譜　音程　音符と休符。 Ｃ（Ｇ）。	メゾスタッカート。 legato、タイ。 低音部加線、拍子。 ソーレのＧポジション。 ラーミのＡｍポジション。 Ｃ　Ｇ　Ａｍ。	オクターブ記号。 八分音符の練習　ヘ音記号 付点四分音符。 Ｃポジション。 音域拡大上下２度。 Ｃ。	ヘ音記号　大楽譜拍子、強弱 legato　dolce、crescendo decrescendo　Ａｍポジション。 ＣポジションＧポジション。	３連符、臨時記号。 前打音　アウフタクト leggiero。 Ｃ、Ｇ、Ｄ、Ａ、Ｅ、Ｆ。

	シュンゲラーピアノ教室１			
	初　歩		中　級	
No.	①　1－31	②　33－61	③　62－92	④　93－121
曲の形態	両手反進行 両手予備練習曲 。 ２声のカノン。 タイトルのある小品３曲。 一部、二部形式。ハ長調のみ。。 ４－－１６小節。。 リズムの訓練第１課主題と変奏１、２。	反進行の練習曲　２声のポリフォニー。 ２声のカノン（模倣　反行形　休符開始曲） タイトルのある小品６曲。一部二部形式。 両手共高音部記号。ハ長調のみ。 ８－－２４小節。 リズムの訓練第１課。変奏３、４、５。	大楽譜　音域拡大　２声のポリフォニー　演奏カノン 声部の入れ替え。。 タイトルのある小品５曲。 二部形式　臨時記号♯の付いた曲　ハ長調 。 ４－－１６小節。。 リズムの訓練第１課。変奏６、７、８、	ホモフォニック２曲。６度の和音楽曲。 。 タイトル付き小品５曲。左手の保持音曲。。 二声の模倣、声部の受け渡し、掛け合い。。 ハ長調の曲とイ短調の曲　音階と
楽典	全音符、２分音符、４分音符 。 ト音記号、タイ　スラー　legato 。 フレーズ弧線　連弾のみ速度記号有り。 ４　２　３　拍を数える。。 ４　４　４。	音名。８分音符。１６分音符。音符と休符の層時。　付点複付点音符。 付点音符による色々なリズムの組み合わせ。 ６　３　メロディと拍子、スタッカート。 ８　８　オクターブ記号。	△音記号　ｆ　ｍｆ　ｐ 。 シンコペーション、スタッカート、。 臨時記号　強弱記号　♯と 。 音域拡大。	主要三和音の基本形と転回形　長調と短調　長音階と短音階その終止形　♭、重音。 アルペジオ音域の拡大　crescendo、decrescendo、３・２拍子。

おわりに

私が，シュンゲラーピアノ教本と出逢ったのは30年前になる。市内Ｃ校保育科のピアノテキストを，バイエルをより効率の良い教則本に替える目的で学生にレッスン用として使用したのが教本に出会う契機となった。それまでにも存在は知っていたが，実際に使うことは初めてであった。まだ，その時は曲の短さと数の多さにポリフォニーの教育的価値を理解していなかった。その後ピアノ実技授業のテキストとしてバイエルとシュンゲラーを使用した。２冊を使用した期間はほぼ20年で，学生の年齢，学習期間，学習目標は同じである。その過程で２冊の教材の違いによるピアノ技術力の差を比較することが出来た。その結果，バイエル80番以降や小学校共通教材の比較的難しいものにおいても「シュンゲラー１」の180番終了段階であれば，初心者にも問題なく対処できた。

シュンゲラーの作曲法としてのポリフォニックな教材は，初心者に教育的利点が高いと考え２冊を分析・比較検討し，ポリフォニーの利点を整理した結果，改めてシュンゲラーは保育士を目指す学生にとって独習も出来る親切な良書であることが立証され，是非活用したいと思った。

今後，２冊の合体した教則本を作成し，学生のレッスンに生かしながらポリフォニー曲の初心者に於けるピアノ技術の向上効果を検証していきたい。

参考文献

・柳田考義(2012)「名曲で学ぶ対位法」音楽之友社
・安田　寛(2012)「バイエルの謎」音楽之友社
・古谷晋一(2012)「ピアニストの脳を科学する」春秋社
・ピストン W(2009)「対位法　分析と実習」音楽の友社
・南　弘明(1999)「12 音による対位法」音楽の友社
・スワンウィック K(1994)「音楽と心と教育」音楽の友社
・甲斐　彰(2009)「らくらく弾けるピアノコード」音楽の友社
・ピュイグ・ロジエ A(2011)「小さくたってじょうずな手」音楽之友社
・千倉八朗(1970)「バルトーク・〈ミクロコスモス〉への手引き」東京音楽社
・木村雅信(1972)「こどもの対位法 1」全音楽譜出版社
・山口雅敏(2012)ピアノ「演奏技巧と脳機能を発達させる対称的練習法」
　── ルドルフ・ガンツによる練習曲 ── 大阪総合保育大学紀要
・柏瀬愛子・牛田幸子(2009)「ピアノ教則本バイエルについて分析とその活用」中京女子大学紀要
・標準バイエルピアノ教則本(1955)全音楽譜出版社
・シュンゲラーピアノ教室 1 (1977)音楽之友社
・町田育弥(2011)「みみをすます」3 ── ピアノとソルフェージュの本 ── 音楽の友社

引用

・古谷晋一(2012)「ピアニストの脳を科学する」春秋社　P 29 より